

## 植物学者 三好 學 研究資料 II

安藤 裕・落合照雄\*

### 目 次

まえがき

1. 植物天然記念物
2. 桜についての研究
3. ドイツ留学

あとがき

文献・資料

まえがき

本研究紀要 第11号(平成5年)に同題の研究資料<sup>1)</sup>Iを載せた。この資料IIには、Iで取扱った「植物天然記念物」に対する三好の業績の追加、終生続けた桜の研究、帝国大学理科大学の大学院在学中に、日本の国費留学生として赴いたドイツのライプチヒ大学での研究を選んで載せた。

本編も三好の著書・論文或いは三好自筆の資料により纏めたもので、前編同様、断片的なものである。前編で紹介した三好の『授業日誌<sup>2)</sup>』が、平成5年10月に岐阜県岩村町教育委員会から復刻出版され、安藤の解説「授業日誌と三好學<sup>3)</sup>」などが添えられている。

この資料を作るに当り、いろいろなご教示と資料の提供をいただいた三好の郷里の岐阜県岩村町教育委員会の水野恭平教育長先生と職員の方がた、東京教育大学名誉教授伊藤洋先生、岡山大学名誉教授安江安宣先生、筑波大学生物科学系教授牧岡俊樹先生に衷心よりお礼申上げる。

なお、本資料の桜に関する部分は落合が、その他の部分は安藤が分担し、今回も資料としたものの写真やコピーを掲載するように努めた。

### 1. 植物天然記念物

(1) 三好學が調査指定した植物天然記念物

大正8年(1919)史蹟名勝天然記念物の保存法が公布されたのを受けて、三好は史蹟名勝天然記念物調査委員を委嘱され、精力的な調査活動を始めている。最初の調査報告は同年の8月になされ、翌9年2月、『史蹟名勝天然記念物調査報告』第2号(内務省)として印刷発行された。三好の天然記念物の調査は終生続けられ、昭和14年(1839)5月11日の思いがけぬ死も、群馬県館林のツツヂの調査が原因であった。

三好が自身で調査し、植物天然記念物に指定したもののリストは、愛弟子の東京帝国大学名誉教授本多正次博士によって作られているが、その件数は314で、沖縄県を除く日本全土に及んでいる。

昭和11年3月30日発行の『天然記念物調査報告』(文部省)の第16掲に附録として大正8年から昭和10年までの「植物に関する已刊天然記念物調査報告総目次」(1~19頁)が添えられており、三好がいかにも多くの調査をし、いかにも多くの報告書を仕上げているかが判かる。ここでは本田先生の手になる三好が調査

\* 信州淡水研究所(長野市桜新町5-36)

指定した天然記念物のリスト(1973)を表1 に再録しておく。

表1. 三好學が調査・指定した植物天然記念物および名勝一覧表

#### 北海道

野幌原始林・円山原始林・藻岩山原始林・ヒノキアスナロおよびアオトドマツ自生地・霧多布泥炭形成植物群落・鶴川ゴヨウマツ自生北限地帯・歌オブナ自生北限地帯・落合岬のサカイツツジ自生地

#### 青森県

法量のイチョウ

#### 岩手県

盛岡石割ザクラ・シダレカツラ・カズグリ自生地・勝源院の逆ガシワ・長泉寺の大イチョウ・花輪堤ハナショウブ群落・華蔵寺の宝珠マツ・竜谷寺のモリオカシダレ・実相寺のイチョウ・藤島のフジ

#### 宮城県

苦竹のイチョウ

#### 秋田県

長走風穴高山植物群落・芝谷地湿原植物群落

#### 山形県

伊佐沢の久保ザクラ・東根の大ケヤキ・熊野神社の大スギ

#### 福島県

三春滝ザクラ・吾妻山ヤエハクサンシャクナゲ自生地・赤井谷地沼野植物群落・須賀川の牡丹園(名勝)・荒井の大ヤマモミジ・猪苗代湖ミズスギゴケ群落・馬場ザクラ・中釜戸のシダレモミジ・諏訪神社の爺スギ媼スギ

#### 茨城県

いぶき山イブキ樹叢・桜川(サクラ)(名勝)・安良川の爺スギ・白旗八幡宮のオハツキイチョウ・大戸のサクラ

#### 栃木県

コウシンソウ自生地・金剛ザクラ・逆スギ

#### 群馬県

安中市のスギ並木・原町の大ケヤキ・横室の大カヤ・榛名神社の矢立スギ・躑躅ヶ岡(ツツジ)(名勝)・三波川(サクラ)・華蔵寺のキンモクセイ・永明寺のキンモクセイ

#### 埼玉県

田島ヶ原サクラソウ自生地・石戸蒲ザクラ・牛島のフジ・吉見百穴ヒカリゴケ発生地・与野の

大カヤ

#### 千葉県

太東海浜植物群落・成東町肉食植物産地・清澄の大スギ・府馬の大クス・神崎の大クス・竹岡のヒカリモ発生地・千本イチョウ・向山フジザクラ樹林

#### 東京都

小金井(サクラ)(名勝)・馬場大門のケヤキ並木・善福寺のイチョウ・三宝寺池沼沢植物群落・大島のサクラ株・練馬白山神社の大ケヤキ・幸神社のシダレアカシデ

#### 神奈川県

早川のヒランジュ・箒スギ・城願寺のビャクシン・山神の樹叢

#### 新潟県

了玄庵のツナギガヤ・鳥屋野の逆ダケの藪・田上村ツナギガヤ自生地・梅護手寺の珠数掛ザクラ・極楽寺の野中ザクラ・將軍スギ・宮堅八幡宮社叢・小木の御所ザクラ・小山田ヒガンザクラ樹林・鶴川神社の大ケヤキ・椽平サクラ樹林・虫川の大スギ・能生白山神社社叢

#### 富山県

十二町濁オニバス発生地・北般若の毘沙門スギ・上日寺のイチョウ・脇谷のトチノキ・利賀のトチノキ・宮崎鹿島樹叢

#### 石川県

篠原のキンメイチク・栢野の大スギ・御仏供スギ・鹿島の森・堂形のシイノキ

#### 福井県

常神のソテツ・小浜神社の九本ダモ・万徳寺のヤマモミジ・専福寺の大ケヤキ・杉森神社のオハツキイチョウ

#### 山梨県

山高神代ザクラ・富士山原始林・山ノ神のフジ・精進の大スギ・躑躅原レンゲツツジおよびフジザクラ群落・三恵の大ケヤキ・上沢寺のオハツキイチョウ・本国寺のオハツキイチョウ・美森の大ヤマツツジ・八木沢のオハツキイチョウ

#### 長野県

東内のシダレエノキ・小野のシダレグリ自生地・西内のシダレグリ自生地・岩村田ヒカリゴケ

産地・テングノムギメシ産地・新野のハナノキ  
自生地・八ヶ岳キバナシャクナゲ自生地・素桜  
神社の神代ザクラ

#### 岐阜県

坂本のハナノキ自生地・久々利のサクライソウ  
自生地・竹原のシダレグリ自生地・根尾谷薄墨  
ザクラ・弥蔵薙ハナノキ・富田ハナノキ自生地  
・釜戸ハナノキ自生地・越原ハナノキ自生地・  
揖斐二度ザクラ・加子母のスギ・霞間ヶ溪（サ  
クラ）・久津八幡神社の夫婦スギ・禅昌寺の大  
スギ・千光寺の五本スギ・中将姫誓願ザクラ・  
神測神社の大スギ・楓谷のヤマモミシ樹林・一  
之瀬のホンシャクナゲ群落・下野の女夫マツ・  
神ノ御杖スギ・垂洞のシダレモミ

#### 静岡県

狩宿の下馬ザクラ・竜華寺のソテツ・能満寺の  
ソテツ・大瀬崎のビャクシン樹林・熊野の長フ  
ジ・葛見神社の大クス・阿豆佐和気神社の大ク  
ス・三島神社のキンモクセイ・八幡野<sup>八幡宮</sup>  
社叢・新町の大ソテツ・杉梓別命神社の大クス

#### 愛知県

川宇連ハナノキ自生地・木曾川堤（サクラ）・  
清田の大クス・八百富神社社叢・鳳来寺山・神  
明社のシイ・名古屋城のカヤ・羽豆神社の社叢  
・小堤西池のカキツバタ群落・牛久保のナギ・  
津島の大ムク

#### 三重県

東阿倉川イヌナシ自生地・西阿倉川アイナシ自  
生地・白子不断ザクラ・不動院ムカデラン群落  
地・高倉神社のシブナシガヤ・果号寺のシブナ  
シガヤ・棕本の大ムク・斎宮のハナショウブ群  
落・九木神社樹叢・金生水沼沢植物群落・三多  
気ザクラ（名勝）

#### 滋賀県

平松ウツクシマツ自生地・南花沢のハナノキ・  
北花沢のハナノキ・熊野のヒダリマキガヤ・了  
徳寺のオハツキイチョウ・鎌掛谷ホンシャクナ  
ゲ群落

#### 京都府

御室（サクラ）（名勝）・深泥池水生植物群落・  
遊竜松・常照寺の九重ザクラ・大田ノ沢のカキ  
ツバタ

#### 大阪府

妙国寺のソテツ・薫蓋ス

#### 兵庫県

妙見の大スギ・生島樹林・日置のハダカガヤ・  
淡路国道マツ並木・千手のマツ・八代の大ケヤ  
キ

#### 奈良県

千足院ナラヤエザクラ・春日神社境内ナギ樹林  
・妹山樹叢・室生山暖地性シダ群落・向湖スズ  
ラン群落・吐山スズラン群落・ハツ房スギ

#### 和歌山県

新宮蘭沢浮島植物群落・ユノミネシダ群落・神  
島・熊野速玉神社のナギ

#### 鳥取県

波波伎神社社叢・倉田八幡宮社叢・大野見宿禰  
命神社社叢・伯耆の大シイ・白兔神社樹叢

#### 島根県

クロキツタ産地・日御碕の大ソテツ・高津連理  
のマツ・三隅大平ザクラ・海潮のカツラ

#### 岡山県

トラフダケ自生地・菩提寺のイチョウ

#### 広島県

沼田西のエヒメアヤメ自生南限地帯・忠海八幡  
神社社叢

#### 山口県

川棚のクスの森・小郡町ナギ自生北限地帯・共  
和のカシの森・笠山コウライタチバナ自生地・  
満珠樹林・千珠樹林・大日比ナツミカン原樹・  
平川の大スギ・法泉寺のシンパク・大玉スギ・  
小串町エヒメアヤメ自生南限地帯・佐賀の夫婦  
マツ・峨嵋山樹林・余田臥竜梅・河原の大ガシ  
・木部の大センダン

#### 徳島県

鳴門の根上りマツ

#### 香川県

宝生院のシンパク・誓願寺のソテツ・白鳥のウ  
バメガシ・皇子神社社叢

#### 愛媛県

下柏の大柏（イブキ）・福岡八幡神社樹叢・往  
至森寺のキンモクセイ・千疋のサクラ（名勝）

#### 高知県

タチバナ・大谷のクス・杉の大スギ・伊尾木洞  
のシダ群落・平石の乳イチョウ・八束のクサマ  
ルハチ自生地

#### 福岡県

太宰府神社のクス・湯蓋の森（クス）・本庄の  
クス・衣掛の森（クス）・沖の島原始林・久喜宮  
のキンメイチク・黒木のフジ・立花山クスノキ

原始林・隠家森・鎮西村のカツラ・太宰府神社のヒロハチシャノキ

#### 佐賀県

川古のクス・広沢寺のソテツ・有田のイチョウ・嬉野の大チャノキ・普明寺のキンモクセイ・黒髪山カネコシダ自生地・高串アコウ自生北限地帯

#### 長崎県

鱒浦ヒトツバタゴ自生地・地獄地帯シロドウダン群落・野岳イヌツゲ群落・普賢岳紅葉樹林・原生沼沼野植物群落・池の原ミヤマキリシマ群落

#### 熊本県

藤崎台のクスノキ群・手野のスギ・スイゼンジノリ発生地・立田山ヤエクチナシ自生地・笛鹿のイチイガシ・大野下の大ソテツ・阿弥陀スギ・下の城のイチョウ・麻生原のキンモクセイ・竹の熊の大ケヤキ・下田のイチョウ

#### 大分県

柞原八幡宮のクス・松尾寺のソテツ・大杵社の

#### (2) 植物天然記念物の保護

“Preservation of Botanical Natural Monuments” 図版20、地図1

内務省刊行(1926)の『Preservation of Natural Monuments of Japan』 pp. 5 ~ 16 (19×26cm) (図1)

この出版物は、1926年10月30日~11月11日まで、東京で第3回汎太平洋会議が開催された際に内務省で準備したものである。内容は I. Law for Preserving Scenery and Historic and Natural Monuments. II. Outline of Regulations for the Preservation of Natural Monuments III. Preservation of Botanical Monuments (三好學) IV. Preservation of Geological Natural Monuments (佐藤傳蔵) V. Preservation of Zoological Natural Monuments (渡瀬庄三郎) より成っている。第II章によると過去8年の間に420の保護指定があり、その内訳は歴史的なもの166、景観についてのもの47、動物

大スギ・緩木神社のマツ

#### 宮崎県

狭野のスギ並木・高島のヒロウ自生地・古江のキンモクセイ・八村スギ・湯ノ宮の座論梅・高岡の月知梅・去川のイチョウ

#### 鹿児島県

キイレツチトリモチ産地・ヤッコソウ発生地・蒲生のクス・鹿児島県のソテツ自生地・ヒガンザクラ自生南限地帯・川内川のチスジノリ発生地・栗野町ハナショウブ自生南限地帯・塚崎のクス

#### 二都府県以上にわたるもの

ツバキ自生北限地帯(青森、秋田)  
ハマナス自生南限地帯(茨城、鳥取)  
エヒメアヤメ自生南限地帯(山口、佐賀、愛媛)  
ノカイドウ自生地(宮崎、鹿児島)  
ヘゴ自生北限地帯(東京八丈島、鹿児島)

が24、植物が146、地学・鉱物が19である。三好は第III章を担当し、表題その他は上に示した通りで、内容は次の様である。

まず、植物天然記念物として保護、保存を必要とするものとして17の項目を上げ、その内から「社叢、巨樹、名木、典型的な原始林、典型的な高山植物群落、溶岩洞窟の高山植物群落、珍稀植物の自生地、著るしい植物の分布境界、野生植物に現われた著るしい畸態、オニバス *Euriale ferox* Salise の自生地、典型的な泥炭地、海岸小島嶼の特種植生」についての概説をし、「高砂の相生の松」に始まり、「ヒカリゴケ」までの解説を、20の写真図版と「富士山の原始林保護区」の地図を添えて行っている。

なお、前報(1992)<sup>4)</sup>の166頁、右側、上から9、10行目は、“Preservation of Botanical Natural Monuments” 内務省刊、1926(大正15年)に訂正する。

(3) 雑誌『史跡名勝天然記念物』への寄稿

### III. PRESERVATION OF BOTANICAL NATURAL MONUMENTS

By

MANABU MIYOSHI

With 20 plates and 1 map

Botanical natural monuments are preserved according to the objects prescribed in the following list.

1. Shrine groves, remarkable avenues of trees, noted trees, giant trees, ancient trees.
2. Typical primeval forests, rare forest forms.
3. Typical alpine vegetations.
4. Habitats of rare plants.
5. Boundaries of natural distribution of remarkable plants.
6. Rare original habitats of cultivated plants.
7. Wild plants showing remarkable monstrosities.
8. Plants upon the point of extinction.
9. Rare species of aquatic plants, algae, mosses, liverworts, and lichens, growing in ponds, lakes, rivers and seas.
10. Caves and waterfall basins where characteristic plants are found.
11. Peat bogs with typical peat producing plants.
12. Sand dunes with sand fixing plants.
13. Thermal springs in which characteristic plants (algae and bacteria) abound.
14. Typical natural meadow-plant formations.
15. Grounds where orchids, ferns, lycopods, twining plants, mosses and lichens flourish, or trees on which these plants grow together.
16. Offshore islets possessing a peculiar flora.
17. Rare useful wild plants.

( 5 )

図 I 三好學の“Preservation of Botanical Natural Monuments”(1926)の第 I 頁

創巻の大正3年から12年までに三好が同誌へ寄せた報文などのリストを表2に掲げよう。

表2. 雑誌『史跡名勝天然記念物』(史跡名勝天然記念物協会発行 大正3年9月より)

大正3年	(9月) 欧米各国に於ける天然記念物保存事業視察談 1巻1号3-4頁
3	全 1, 2, 11-12
5	優れたる桜の品種 1, 10, 73-74
5	天然記念物の保存に就て 1, 12, 91-92
5	天然記念物保存雑記 1, 14, 110-111
6	全 (続) 1, 15, 117-120
6	公園庭園等に植栽すべき桜樹の品種に就て 1, 17, 131-132
6	日の出桜と杉の木苔に就て 1, 21, 170
7	日本記念植物の保存に就て 2, 11, 81-83
8	霞間ヶ谷の桜 3, 2, 9-11
8	植物の利用と保存 3, 4, 25-27
8	中野博士の浮島研究紹介 3, 5, 33
8	史跡名勝天然記念物保存法の発布に就て 3, 7, 49-50
8	芭蕉の句碑と名勝地の記念 3, 10, 76-80
10	花の木に就きて 4, 1, 27-28
10	桜草の自生地に就て 4, 4, 43
10	枝垂栗に就て 4, 5, 54-55
10	岩手県下旅行雑記 4, 7, 75-76
10	巨樹の太さの測り方並に保存に就て 4, 10, 115-116
10	長野県に産する天狗の麦飯に就きて 4, 11, 124-125
11	犬山城と村瀬太乙 5, 2, 14-15
11	桜品と桜畫 5, 4
12	天然記念物としての原始林 5, 12
12	本邦中部に於ける「ひとつばたご」自生地の発見 6, 1, 1-2
12	桜の名所と其保存 6, 4, 41-43, 46

#### (4) 三好に関連した植物

三好は分類学者ではないが、彼が発見し、記載した植物に「こうしんそう」*Pinguicula ramosa* Miyoshi (たぬきも科 *Lentibulariaceae*)があるが、伊藤洋先生のご教示によると、この他に三好を記念した植物の学名には、次のようなものがあるそうである。

#### *Miyoshia* Makino

サクライソウ属 (1903)

#### *Miyoshiaceae* Makino

サクライソウ科 (1903)

#### *Miyoshiales* Nakai

サクライソウ目 (1941)

#### *Miyoshiella* Kawamura

トラフタケ菌属 (1907)

伊藤先生によると最初、川村は *Miyoshiella* Kawamura (1907) としたが、サクライソウ属の名が先に出ているので、後に *Miyoshiella* に改めたという。

## 2. 桜についての研究

(1) 日本の山桜・里桜の植物分類学的研究と三好學

a) 三好は大正5年(1916年)『日本の山桜、その野生形と培養品種』(*Die japanische Berg-*

kirschen, ihre Wildformen und Kulturrassen) と題する論文を東京帝国大学理科大学紀要、理科第34冊、第1編として発表した。

重桜が存在し、平安時代には沢山の桜の品種があった。現存する“普賢象”(里桜で八重)は足利時代或いはそれ以前からあったのでは

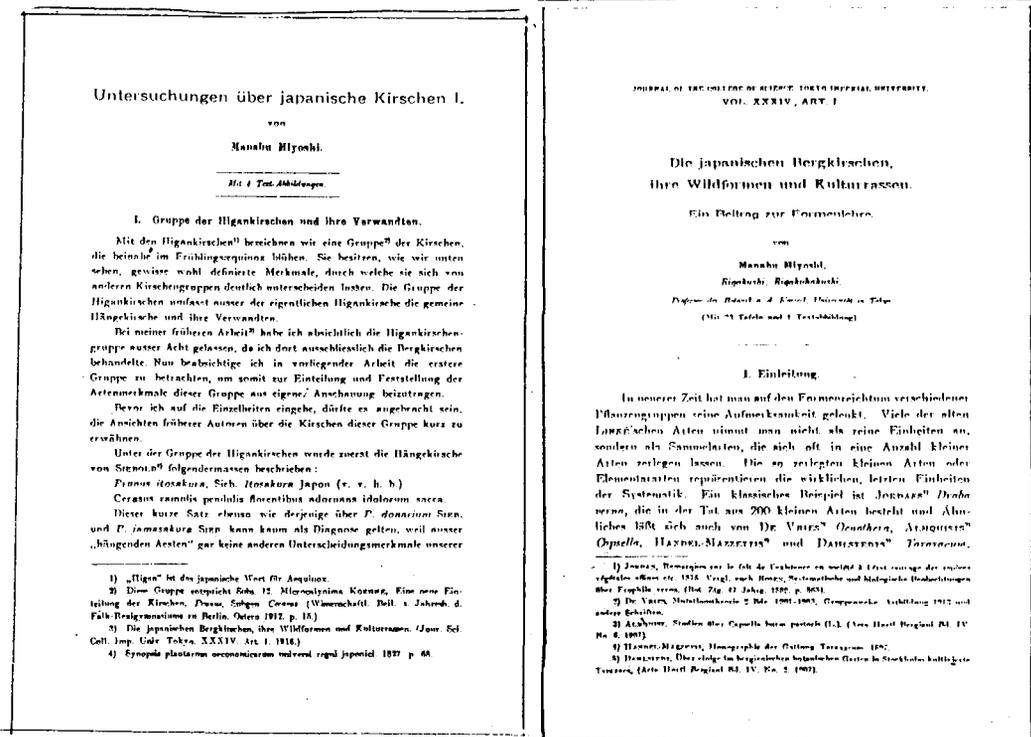


図2 三好の桜の研究 “Untersuchungen über japanische Kirschen I” (1920) (左) と “Die japanischen Bergkirschen, ihre Wildformen und Kulturrassen. Ein Beitrag zur Formenlehre” (1916) (右) の第1頁

B5版、本文175頁、当時としては珍しい着色石版刷で多数の種類の桜の図示(16図版)を含め、23図版が附されている(図2)。

この論文の項目を見ると、第I章 序論、第II章 栽培種(里桜)の歴史、第III章 山桜と写生図の文献、第IV章 日本 の山桜に関する系統的、分類学的業績、第V章 山桜の学名問題、第VI章 野生山桜の種類と品種、第VII章 山桜の栽培種と続き、第VIII章 以下は栽培観察、山桜の奇形、山桜の保護、結語となっている。

重要と思わるところの内容を紹介すると、第II章では今から1000年前の奈良時代には八

ないのかという。江戸時代には京都、その周辺や江戸では大変多くの桜の品種が育てられた。ついで桜の名所として、1000年は経過している吉野山(奈良県)、8kmにわたり玉川上水兩岸に桜が生育している小金井(東京府)、吉野山に次いで来歴が古く、北方系タイプの種が集められている桜川(茨城県)、吉野山の桜を移植したといわれる嵐山(京都市)、荒川沿いに4kmも里桜の品種が植えられている荒川堤(東京府)の5地区が紹介されている。

第III章は山桜、里桜の写生図譜について述べている。古くから桜の愛好家、画家によっ

て沢山の写生図譜が出されている。三熊花顛の「桜譜」、坂本浩然の「桜譜」、堀良山の「桑譜」などを紹介し、これらの図譜は現存する桜の品種と一致するだけでなく、よくその特徴を捉え、葉柄にある蜜腺、鱗片、花卉の脈に至るまで細かく写生されている。

第V章では以前からシナミザクラが日本の山桜と同じ仲間と見られているが違うこと、そして日本の桜の基本種について述べている。

第VI章でいよいよ桜の種類が記述され、野生の桜はヤマザクラ(シロヤマザクラ)とオオヤマザクラ(ベニヤマザクラ)であり、ヤマザクラでは開花直前の芽の色に4種の類別がある。花卉は5枚、6~7枚、10数枚の別があり、香の有無、花梗に毛があるか否か等

により種類が分けられる。

このようにして纏めると、緑芽3種、黄芽14種、茶芽18種、赤芽26種、花梗に毛の有るもの4種で、合計65種をあげている。このうちには匂桜が10種、花卉が6~7枚の桜が3種含まれている。それぞれの桜を新品種として記載し和名をつけ、花や芽の彩色図をほとんどの品種について載せている。これを和名で纏めたものが表3のヤマザクラ系である。なお表中( )のものは、その前にある同一番号の品種と同じであるが、花卉の色が異なる等で区別されるもので、三好により亜品種とされたものである。この記載のもとになった桜は大部分小金井のものであった。

ついで本州の北方に分布しているオオヤマ

表3.「日本の山桜・里桜」種類一覧表

ここでの桜の種別は、1993年、山溪セレクション「日本の桜」の中の川崎哲也解説、木原浩写真「桜図譜」129頁~342頁を参考にした。

種類・品種の大別は、エビヒガン系、ヤマザクラ系、オオヤマザクラ系などとした。

#### ヤマザクラ系

I 青芽	1	青芽桜	
	2	淡雪桜	
		匂桜	
	3	大島桜	
II 黄芽	4	梅鉢桜	
	5	神代の桜	
	6	瑞穂桜	
	7	八房桜	
	8	大花桜	
	9	巴桜	
	10	孫桜	
	11	扇桜	
	12	入日の桜	
	(12)	明石桜	
	13	三吉野桜	
	14	雀桜	
			匂桜
	15	小川匂	
16	荒川桜		

III 茶芽	17	小梅桜	
	18	太枝桜	
	19	鄙桜	
	20	鏡桜	
	21	浮島桜	
	22	東桜	
	23	曾孫桜	
	24	栄桜	
	25	口紅桜	
	26	花月桜	
	27	初桜	
	28	群桜	
	(28)	小鄙桜	
	29	山鳥桜	
			匂桜
	30	桜川匂	
31	吉野匂		
32	鈴成桜		
		八重	
33	八重山桜		

IV 赤芽	34	源氏桜	I 緑芽	a 一重
	35	長柄桜	1	青 葉
	36	弥生桜	2	墨 染
	37	白玉桜	3	虎の尾
	38	枝穂桜	b 八重	
	39	小山桜	4	早晩山
	40	富士見桜	5	雨 宿
	41	二輪桜	6	白 砂
	42	鐘馗桜	II 茶芽	a 一重
	43	日の出の桜	7	水 上
(43)		高嶺桜	8	類 嵐
	44	東天桜	9	明 月
	45	旗竿桜	10	苔清水
	46	星 桜	b 一重八重	
	47	誉 桜	11	鷺の尾
	48	穂咲桜	12	有 明
	49	内裏の桜	13	大提燈
	50	朝日桜	c 八重	
	51	薄紅桜	14	旗 桜
	52	東 桜	15	白花真桜
		匂 桜	(15)	赤花真桜
	53	江北匂	16	牡 丹
	54	磯部桜	B 赤 花	
	55	小金井匂	I 緑芽	a 一重八重
	56	吹寄桜	17	御車還
		一重八重	b 八重	
	57	六弁桜	18	日 暮
	58	大和桜	19	福祿寿
V 有毛	59	青毛桜	20	八重曙
	60	薄毛桜	21	松 月
	61	八房毛桜	II 茶芽	a 一重
	62	立毛桜	22	小汐山
			b 八重	
<b>オオヤマザクラ系</b>			23	九 重
I 赤芽	1	紅桜	24	奥 都
	2	梔子桜	25	祇 女
	3	団扇桜	26	朱 雀
	4	初雪桜	27	法輪寺
	5	小町桜	28	江 戸
II 茶芽	6	羽衣桜	29	王昭君
	7	常磐桜	30	渦 桜
	8	布袋桜	(30)	雲珠桜
	9	紅梅桜	31	五所桜
III 黄芽	10	明星桜	32	一 葉
<b>サトザクラ系</b>			33	紅 鶴
A 白 花				

	34	楊貴妃		I 白花	47	薄 墨
	35	麒 麟			48	白 雪
	36	南 天		II 赤花	49	高 砂
	37	紅虎尾	E 匂 桜			
	38	糸 括		I 緑芽	50	細川匂
III 赤芽	a 一重				51	千里香
	39	嵐 山			52	満里香
	40	便 殿			53	満 月
	41	紫 桜		II 茶芽	54	駿河台匂
	(41)	八重紫桜			55	朧 匂
	b 一重八重				56	上 匂
	42	長州緋桜	F 直 立			
	c 八重				57	天の川
	43	関 山		(57)		七 夕
	(43)	増 山	G 菊 桜			
	44	普賢象			58	菊 桜
	(44)	紅普賢			59	名島桜
C 黄 花					60	鴨 桜
	45	鬱 金			61	小菊桜
	(45)	浅 黄	ホウキザクラ系			
	46	御衣黄			62	猩 々
D 有 毛					63	泰山府君

ザクラについては、赤芽5種、茶芽4種、黄芽1種、計10種ですべて新品種として記載された。和名リストは表3のオオヤマザクラ系にあり、附図に花の写生図を載せているが、桜は日光と札幌のものである。

第七章は栽培種についてである。はじめは里桜である。分類学上の基準としては、開花直前の芽の色、花弁数、花色、花梗の毛の有無、匂桜か否か、木振り、花の着き方等多岐にわたっている。

里桜は古くから先人により育成されたもので花冠が大きく、色もあでやかで、シロヤマザクラに比べてかなり目立つ桜である。三好により古文献等による和名が照合され、新品種として記載されたのは白花で緑芽6種、茶芽11種、赤花で緑芽5種、茶芽18種、赤芽9種、黄花3種、花梗有毛3種、匂桜7種、木振り直立の桜2種、菊桜4種合計68種である。

これら和名リストをまとめると表3のサトザクラ系ようになる。

三好の新品種の記載は、木の大きさ、形、木肌の色、嫩葉の色、葉の色、大きさ、葉柄にある蜜腺の位置・数、葉苞の色・大きさ、花の咲き方、花序の形、花序内の各総軸の長さ、総長、花苞の色・大きさ、小苞の大きさ、萼筒の大きさ、萼歯の形・大きさ、花径、花色、花弁数、花弁の形・大きさ、雌蕊と雄蕊の長さ、花香の有無、花梗の毛の有無、このほか所在、花期、特徴のコメントなど大変詳細である。今まで述べたヤマザクラ、オオヤマザクラ、サトザクラとも上記のように細かに記載されている。

栽培種のもう1つはホウキザクラである。枝細く木全体が帚状を呈することからこの名がつけられたもので、2種が新品種として記載されている。表3のホウキザクラ系に和名

がある。

なおサトザクラ・ハウキザクラとも研究に使われたのはほとんど荒川堤の桜である。

b) 大正10年(1921年)『桜花図譜』を出版した(図3)。これは2帖よりなりB4版横開きで、桜の種類は現寸大で着色木版写生図譜である。上巻には枝垂桜、十月桜を含めてエドヒガン系8種、カンヒザクラ1種、ソメイヨシノザクラ1種にはじまり、ヤマザクラ系39種、オオヤマザクラ系5種、サトザクラ系16種合計70種(正確には2種、68品種)を数える。下巻はサトザクラ42種(正確には42品種)を載せている。この図譜の解説本は同時に発売された『桜花概説』である。この本は桜の種類と名所、桜の略歴、普通の桜の3項目からなり、附録として「増補桜に関する図書解題略」を載せている。

先に発表した東京帝国大学紀要の論文では一般の人々に桜の正しい種類や品種名等の普及をはかることができないことから、紀要になかったエドヒガン系やソメイヨシノザクラなどを加えてこの図譜が作られたものである。はじめ東京で出版する予定のようであったが、結局京都市芸艸堂で出版された。

c) 『桜花図譜』の出版をはさんで三好は第2段の桜の研究を発表した。



図3 『桜花図譜』の図(大正10年、1921)

『日本の桜についての研究』(*Untersuchungen über japanische Kirschen*) (図2)

I 大正9年(1920) 植雑34巻 404号

II 大正11年(1922) 植雑36巻 421号

III 昭和3年(1928) 植雑42巻 504号

の3編よりなり前後9年間かかっている。

I. (図9)の内容は「日本の山桜と里桜」に載せなかったエドヒガン系15種、ヤマザクラ系12種、オオヤマザクラ系1種、サトザクラ系3種、合計31種(正しくは5種、26品種)を19頁にわたり植物分類学上の記載をし、学名をつけている(ただし内1種は記載はあるが学名はつけていない)。記載はかなり詳細であるが、図は線画による葉・花4種のみで、彩色写生図は前記『桜花図譜』の中にと指示している。

II. では三好が日本各地の著名な桜を天然記念物として指定したものなどを中心にして書かれている。ヤマザクラ系7種、カンヒザクラ系3種、カスミザクラ系1種、オオヤマザクラ系1種、サトザクラ系10種、合計22種(正しくは2種、20品種)で14頁にわたり学名が記載されている。

図は1枚も入っていないが『桜花写生図』(大正9年から昭和3年までに画かれた図譜、以後若干追加された。)を見るように指示している。

この中には古歌にうたわれた奈良八重桜や白子の不断桜など有名な桜がとりあげられており、このほかではヤマザクラ系の二度桜(岐阜県)のように二段になって咲く珍しいものも含まれている。

III. ではヤマザクラ系2種、サトザクラ系7種、エドヒガン系2種、フユザクラ系1種、合計12種(正しくは1種、11品種)の学名が8頁にわたり記載されている。附図はなく、

前述の『桜花写生図』の中にある図を指示している。

この中にある目立ったものを挙げると、金沢市兼六公園内にある菊桜で、花弁数が一つの花に300枚という変わったものである。冬桜も研究対象となった。中條姫誓願桜は再記載で

ある。I～IIIの桜をまとめると表4となる。

桜はほとんど日本産といってよい。しかし外国にも野生種はある。明治44(1919年)三好は印度旅行の折にダージリンとその附近の山中でヒマラヤヒザクラ(三好はヒマラヤザクラとよぶ)を観察し、カンヒザクラ(三好は

表4.『日本の桜の研究』種類一覧表

エドヒガン系	発表号		
1 彼岸桜(白彼岸)	I	37 宮居桜	II
2 紅彼岸	I	49 十六日桜	II
3 薄紅彼岸	I	54 誓願桜(再記載)	III
4 薄毛彼岸	I	55 御屋根桜	III
5 群彼岸	I	<b>オオヤマザクラ系</b>	
6 糸桜(枝垂桜)	I	28 錦桜	I
7 紅枝垂	I	38 野中の桜	II
8 八重紅枝垂	I	<b>カスミザクラ系</b>	
9 曙彼岸	I	48 奈良の八重桜	II
10 千代彼岸	I	<b>サトザクラ系</b>	
11 十月桜	I	29 乙女桜	I
12 蒲桜	I	30 尾上桜	I
13 勝手桜	I	31 渋谷金王桜	I
14 白滝桜	I	39 手鞠	II
15 盛岡枝垂	I	40 撫子桜	II
63 四季桜	III	41 白菊桜	II
64 八重四季桜	III	42 数珠掛桜	II
<b>ヤマザクラ系</b>		43 大芝山	II
16 曙匂	I	44 曙	II
17 口紅匂	I	45 玉鉾	II
18 御幸桜	I	46 菊枝垂	II
19 青桜	I	47 二度桜	II
20 白雲桜	I	52 早咲桜	II
21 初見桜	I	53 白子不断桜	II
22 樺匂	I	56 御所桜	III
23 下馬桜(狩宿桜)	I	57 暁桜	III
24 東天匂	I	58 菜配桜	III
25 弥彦桜	I	59 勇桜	III
26 小口紅桜	I	60 今宿桜	III
27 初重桜	I	61 福桜	III
32 八千代桜	II	62 兼六園菊桜	III
33 菊咲山桜	II	<b>フユザクラ系</b>	
34 九重匂	II	50 薄紅寒桜	II
35 八重左近桜	II	51 薄寒桜	II
		65 小葉桜	III

カンザクラと誤用)と比較研究している。

なお、三好はこの桜の分類学的研究にあわせて、桜には「向上性」があると述べている。三好自身の実験によると、山桜で茶芽の実生では、赤芽のものが生ずること。一重桜の実生から6弁~10弁の八重の桜が生ずること、これらを三好は前進的すなわち向上的傾向としている。里桜でも実際に紫桜の実生から八重が、小塩山の實生から八重で句桜が出ている。彼のいう向上性とはシンプルなものからより複雑なものへという事のように、すべて実生で起きているとしている。

同様なことは他の桜でもあり、殊にマメ桜(富士桜ともいう)に著しいという。マメ桜の野生樹林や群落中によく見られ、小輪から中輪・大輪へ、単弁から八重へ、花色も紅色のや、強いものや、かえて純白なものへなどの変化がある。しかし、向上性のない種類もある。この向上性のあるものは、その発現を上手に誘導することにより、より美しい園芸品種ができるので十分研究する必要があると述べている。

(2) 桜の古文獻を活用した三好

三好は桜の品種保存などの熱心な愛好者と交友を深めた。荒川堤の桜の保存に終生尽した船津静作氏などはその一人である。そこでは桜の品種がきちんと整理され、台帳も保管されており、古くからの名花が植えられていた。

日本人の桜好きはかなり以前からで、沢山の山桜・里桜の写生図譜が残され、墨跡があり、和歌にうたわれていた。三好は桜の品種の同定のためこれら古文獻、特に写生図譜を丹念に調べ、何人かの撰者や写生画家を発掘した。残された桜図譜の中は極めて正確に写生され、着色され、芸術的にも優れた作品が

多く、そのうえ各図に品種名がつけられていて、現存する品種と照合すると一致していた。これらの人々を三好がまとめたのが表5である。

それによると正保年間(1655年前後)に著された那波活所による「桜譜」には12種の桜の記載があるが、これは恐らく我が国最初のまとまった桜図譜であると述べている。

寛政の頃、桜の熱心なる愛好者であると同時に優れた画家でもあった三熊花顛は、妹の露香と共に桜の観察と写生に努め寝食を忘れる程であったという。京都に住み「桜花帖」に36種の桜を写生し桜の好きな人に贈っている。

この「桜花帖」の画について三好は次のように述べている。

1. 一つ一つの桜の品種の特徴を画面に現わしている。

表5. 桜の蒐集家、寫生畫家、愛護家

那波活所	正保	12種
稻生若水	元禄	26種
松岡恕庵	正徳	69種
三熊花顛(畫)	寛政	36種
同 露香(畫)		
廣瀬花隱(畫)	文政	36種
織田瑟瑟(畫)		
市橋星峯	享和 文化	234種
櫻井雪鮮(畫)		
白河樂翁	文政	124種
屋代弘賢	文政	64種
三好汝圭(畫)		
久保櫻顛(畫)	天保	136種
坂本浩然(畫)		
堀良山	文久	250種
櫻戸玉緒(畫)	明治	150種
跡見玉枝(畫)	現代	

2. 古い雅かな描法により桜の自然の姿・形と生態とを現わすことに努めている。
3. 幹・枝を淡墨にて画き、花に十分の色づけをしている。
4. 若葉の色と形の変化をはっきりと現わしている。

専門的方面から見て、この本は百餘年の昔の作品であるがよく桜の品種の特徴をつかんでおり重要な参考資料となると三好は高く評価している。

同じ頃江戸では桜園がもうけられ沢山の名花が栽培されていたが、本所市橋星峯邸にあった桜の品種を画家桜井雪鮮によって200種余画かれたものに「桜譜」があった。

江戸時代後期最も名高かったのは麻布長者ヶ丸桜園である。これは久保帯刀邸にもうけられたもので、彼も大変な愛桜者であったという。この桜を写生したのが坂本浩然で「長者ヶ丸桜譜」といい134種の里桜が画かれている。彼には別に「群桜花譜」130図がある。

このほか著名なものとして文久元年(1861)堀良山(長野県須坂藩主)による「桑譜」がある。この写生本には252図の桜の品種が彩色画として載せられているが、その大部分は市橋長昭の「花譜」より転載したものであるという。

以上、三好が紹介した文献の図譜や画家について彼の論文の中から引用したが、古文獻の中に見える桜の名所を三好がまとめたものが表6である。これで見ると山桜は山や堤を中心に広範囲な地区にわたっているが、里桜は荒川堤を除いては個人宅邸で植栽されていた。

三好はこのように古文獻を活用するだけでなく自らも収集に努めた。そして、それらに通し番号をつけ「桜に関する図書解題略」

表6. 桜の名所及桜の品種の植場所

吉	野	山桜	
櫻	川	山桜	
小	金井	山桜	元文頃
嵐	山	山桜	元文頃
霞	間ヶ谷	山桜	享祿
本所五の橋(市橋星峰)		里桜	享和 文化
浴恩園(白川樂翁)		里桜	文政
長者ヶ丸桜園(久保櫻顔)		里桜	天保
高木孫右衛門種樹園		里桜	明治
荒川(江北)堤上		里桜	明治

という名称のもとに『桜花概説』・『桜』・『史蹟名勝天然記念物』に載せているが、総数876篇の多数にのぼっている。その部門別の数は表7の通りで、これら収集した文献の桜の品種、名所、名木、巨樹等に関するものの要点を次の8項目にまとめている。

1. 珍奇な桜の品種の記載と写生図は宝暦の頃(18世紀半ば)から出ていた。
2. 桜の品種の美しい写生図を集めた桜花譜類は寛政・文化・文政・天保(18世紀末~19世紀前半)の間に作られたものが多い。
3. 桜の品種を正しく表わした画は安永の頃(18世紀末)から知られている。

表7. 桜に関する図書解題数

品	種	58	名所の櫻	
寫	生	70	吉	野 75
繪	畫	39	櫻川並雨引山	20
墨	跡	58	嵐山嵯峨東山等	31
雜	說	145	隅田川	10
詩		31	上野	6
和	歌	39	小金井	34
狂	歌	23	荒川(江北)	11
俳	句	44	其他の名所	182
			總計	876

4. 昔の和歌に詠まれたる桜は、山桜である。
5. 狂歌・俳句に現われたる桜には里桜の個々の品種が少なくない。
6. 桜の名所のなかで、吉野山についての文献が最も多い。これはお花見の歴史が古いからである。
7. 小金井の桜についての文献がや、多いのはそれが江戸に近かった為である。
8. 桜の巨樹・名木に関する記事・図絵等は単行本または一枚ずりで発行され、名所図絵・随筆・紀行その他の本のなかに見られるものも少なくない。

(3) 桜の天然記念物と三好

桜の研究を進めていった三好は巨樹・名木等を国内各地に訪ね、いくつかの桜の保護・

保存をはかるため名勝・天然記念物指定に努力した。三好が係わった桜についてまとめたのが表8である。

これをまとめると、名勝7件、名勝及び天然記念物3件、天然記念物31件計41件となる。

このうち名勝、名勝及び天然記念物は桜の集団生育地である。天然記念物としては巨樹が目立っている。巨樹第1、第2といわれる目通幹囲の大きいものは圧倒的に彼岸桜か枝垂彼岸桜で、大変長寿である。根尾谷の淡墨桜、三春の滝桜、長野市芋井の神代桜などはこれに該当する。山桜にもこのような長命なものがある。

名木といわれるものの中には、古来からの由緒のあるものが多い。「いにしへの奈良の都の八重桜…」の古歌に因んで名付けられた奈

表8. 三好の報告により名勝・天然記念物となった桜一覧

名 勝				9	三重県	照源寺の金龍桜	里 桜	名木
1	奈良県	吉野山	山 桜	10	金沢市	兼六公園の菊桜	菊 桜	名木
2	京都市	御 室	里 桜	11	岐阜県	根尾谷淡墨桜	彼岸桜	巨樹
3	京都市	嵐 山	山 桜	12	岐阜県	掛斐二度桜	山桜系	名木
4	東京都	小金井	山 桜	13	岐阜県	中将姫誓願桜	山 桜	名木
5	東京都	荒川堤	里 桜	14	岐阜県	狩宿下馬桜	山 桜	巨樹
6	茨城県	桜 川	大山桜	15	山梨県	山高神代桜	彼岸桜	巨樹
7	宮城県	榴ヶ岡	彼岸桜 枝垂桜	16	山梨県	つつじ原の富士桜	マメ桜	樹林
名 勝及び天然記念物				17	長野県	素桜神社の神代桜	彼岸桜	巨樹
1	岐阜県	霞間ヶ谷	山 桜 彼岸桜	18	新潟県	梅護寺の数珠掛桜	里 桜	名木
2	岐阜県	木曾川堤	彼岸桜 枝垂桜	19	新潟県	極楽寺の野中桜	大山桜	名木
3	埼玉県	熊 谷 堤	染井吉野桜	20	新潟県	小木の御所桜		名木
天然記念物				21	新潟県	小山田彼岸桜樹林	彼岸桜	樹林
1	鹿児島県	彼岸桜白生南限地	彼岸桜	22	新潟県	椽平桜樹林	大山桜他	樹林
2	島根県	三隅太平桜	彼岸桜 巨樹	23	群馬県	三波川の冬桜	冬 桜	樹林
3	京都市	京都御所の左近の桜	山 桜 名木	24	埼玉県	石戸蒲桜	彼岸桜	巨樹
4	京都市	祇園の枝垂桜	枝垂山桜 巨樹	25	東京都	大島の桜株	大島桜	巨樹
5	奈良市	知足院奈良八重桜	霞桜系 名木	26	東京都	白山旗桜	里 桜	名木
6	大阪府	磯良神社の伊保桜	八重山桜 名木	27	茨城県	大戸の桜	山 桜	巨樹
7	滋賀県	醒井の不断桜	山桜系 名木	28	栃木県	金剛桜	山 桜	巨樹
8	三重県	白子の不断桜	山桜系 名木	29	福島県	三春滝桜	彼岸桜	巨樹
				30	山形県	伊佐沢の久保桜	彼岸桜	巨樹
				31	盛岡市	盛岡石割桜	彼岸桜	名木

良知足院の奈良八重桜(奈良市)、冬も葉が落ちず花が咲いている白子の不断桜(三重県)、1段目の開花のあともう1回2段目が花咲く揖斐の二度桜(岐阜県)、冬になって咲く三波川の冬桜(群馬県)、花卉が極端に多弁化して300枚にもなった兼六園の菊桜(金沢市)、これらはいづれも天然記念物に指定されたものである。

d) 三好はこの間に『小金井桜花図譜』2冊を書いている。小金井堤は山桜の名勝で、第1輯はA4版、昭和2年(1927年)に出され(図4)、第1から第14図版まで、最初の“富士見桜”のみ着色図版で残りは単色となっている。第二輯は昭和3年(1928年)に出され、第15から第29図版までの15図版で扉頁の“鐘馗桜”のみ彩色で、共に名勝天然記念物に関するものとしての東京市役所の出版である。

e) もう1冊は『荒川堤の桜』である。これは東京府名勝天然記念物調査報告書第8冊と

して昭和6年(1931年)に出されたもので、B5判である。荒川堤は里桜の名勝である。桜の栽培の由来、桜品種の来歴、そして桜品種の概略な記載があり、白花14品種、1亜品種、紅花29品種、緑花2品種、有毛3品種、匂桜7品種、上向き1品種、1亜品種、合計56品種・2亜品種のサトザクラが紹介されている。このほかホウキザクラ・ヤマザクラの5品種も植えられている。最後に22枚の図版があり、うち16図版が品種の写真で、最初の方は10品種の彩色写生図となっている。三好は早くから当時としてはそれ程普及していなかったカメラによる写真を論文に活用しているが、三好自身の撮影になるものが殆んどであるだけでなく、すばらしい作品である。

大正8年(1919年)「史蹟名勝天然記念物保存法」施行以来、長逝の昭和14年(1939年)までの21年間に41件、自ら足をはこんで調べ報告書を執筆している。その文章は明快かつ要をえて文学的に香り高いものであった。

三好が建議、法律作成、施行、調査報告と生涯の情熱を捧げたこの法律は、戦後「文化財保護法」の中に包括されて大きく生きている。

#### (4) 桜の知識普及に尽した三好

大正6年(1917年)4月23日、第1回「桜の会」が帝国ホテルで開催された。この席で三好は「桜の知識」と題する講演をしている。これを機に「桜の会」が結成され、三好は顧問に推挙された。この会の設立趣意によると、「桜は古来我国の国花と称せらる。輒近急激なる物質的進歩に伴ひ、この花を顧るもの少なくなり、名木次第に凋落せんとする。誠に惜むべく悲しむべき事なり。今に於て愛護の方法を講ぜざれば妙品名桜も終に亡び…相謀りて茲に桜の会を起し斯の花の愛護と伝播に

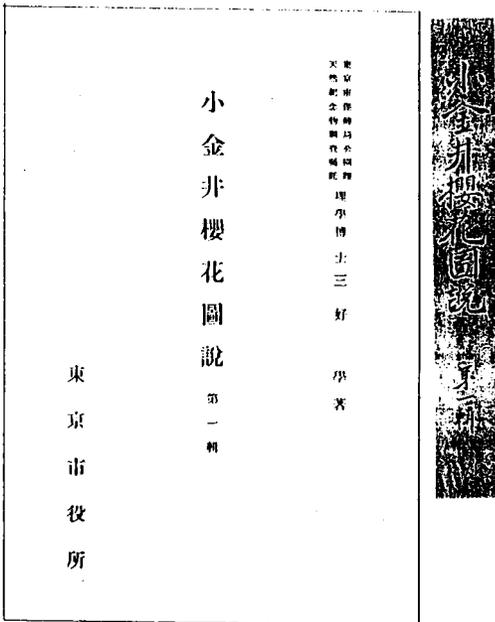


図4 「小金井桜花図説」第1輯の扉と三好自筆の表紙題字

勉めんとす」とあり。講演会、会報発行、桜苗木配布など実施している。

会報『桜』（図5）は年1回発行され、桜についての著名な方々の寄稿が満載されている。昭和13年(1938年)第19号頃になると政府の思想統制が始まり、昭和18年(1943年)には遂に梅の会と合併し梅桜会となり会報が『梅と桜』と改称され、『桜』は会報23号となり終刊している。

三好は昭和14年(1939年)に亡くなるまで、ほとんど毎号寄稿している。初めの頃は桜の会をはじめ各地で講演した内容をまとめたものであった。

江戸時代以来の桜(大正8年武蔵野会講演)

桜2号

科学上より見たる日本の桜(大正9年桜の会講演)

桜3号

昔の桜と今の桜(大正9年南葵文庫講演会)

桜4号

桜に就て(大正10年岩手県黒沢尻和賀展勝会講演)

桜5号

昭和5年3月には東北帝国大学卒業式記念講演会に招かれている。この講演内容は会報桜にはなく単行本『桜』に載っている。

このほか口絵に何枚かの桜の写真を提供している。『桜』第1号では小金井の日ノ出桜を、第2号では荒川堤の有明と法輪寺の2枚のすばらしい写真が掲載されている。

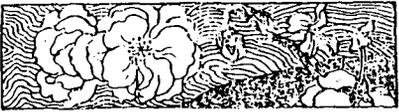
大正14年(1925年)三好は桜の会副会頭となり、以後亡くなるまで15年間この職にあった。

会報『桜』は昭和55年(1980年)に復刻版が出された。その折第2巻第5号~第8号の巻頭に桜の会幹事長前島康彦は桜の会に情熱を注いだ三好とのかかわりについて次のようにのべている。「桜の会の発祥のそもそもの遠因となったのは、奇しくも東京府下小金井堤の桜保存問題である。江戸時代以来の桜の名所であったこの堤が明治時代に至り衰頹枯損著しくなった。早くからこれを研究していた三好は、早急に保護を必要とする事を痛感し、明治45年初春戸川安宅氏と連名で“小金井上水路堤上桜樹保護について”の請願を東京市長に提出、これが東京市会にとりあげられ1500円の保護費がついき、大正2年より保護が開始された。

東京市が小金井の桜の保護をはじめた直前に、尾崎市長による大量の日本の桜をアメリカ合衆国首都ワシントンへ寄贈する快挙があった。この時の染井吉野桜のほか特に里桜の品種選定には三好の力に負う所が多かった。

三好は昭和14年、79才で世を去ったが、実に「桜の会」を支えた大きな柱であったことを忘れてはならないであろう。

そして毎号に必ず貴重な文章を載せたのが



**桜 第一號 目次**

表紙	期 間	大正七年四月
口絵	編 者	三好 野 郎
櫻の發刊に當りて一言	編輯	三好 野 郎
櫻の會の起因	印刷	三好 野 郎
櫻の對する希望	發行	三好 野 郎
櫻の新名所を作らん	代 理	三好 野 郎
花 櫻	代 理	三好 野 郎
日本魂の象徴	代 理	三好 野 郎
櫻の思ひ出	代 理	三好 野 郎
東京の櫻	代 理	三好 野 郎
東京市の櫻に對する方針	代 理	三好 野 郎
櫻と國民性	代 理	三好 野 郎

図5 『桜』第1号の目次(大正7年、1918)

三好であり、山田孝雄博士である。三好は『桜』掲載の多くの記事をまとめて昭和10年に『桜』

という単行本を出している(図6)。

三好が『桜』誌上に発表したものを項目別

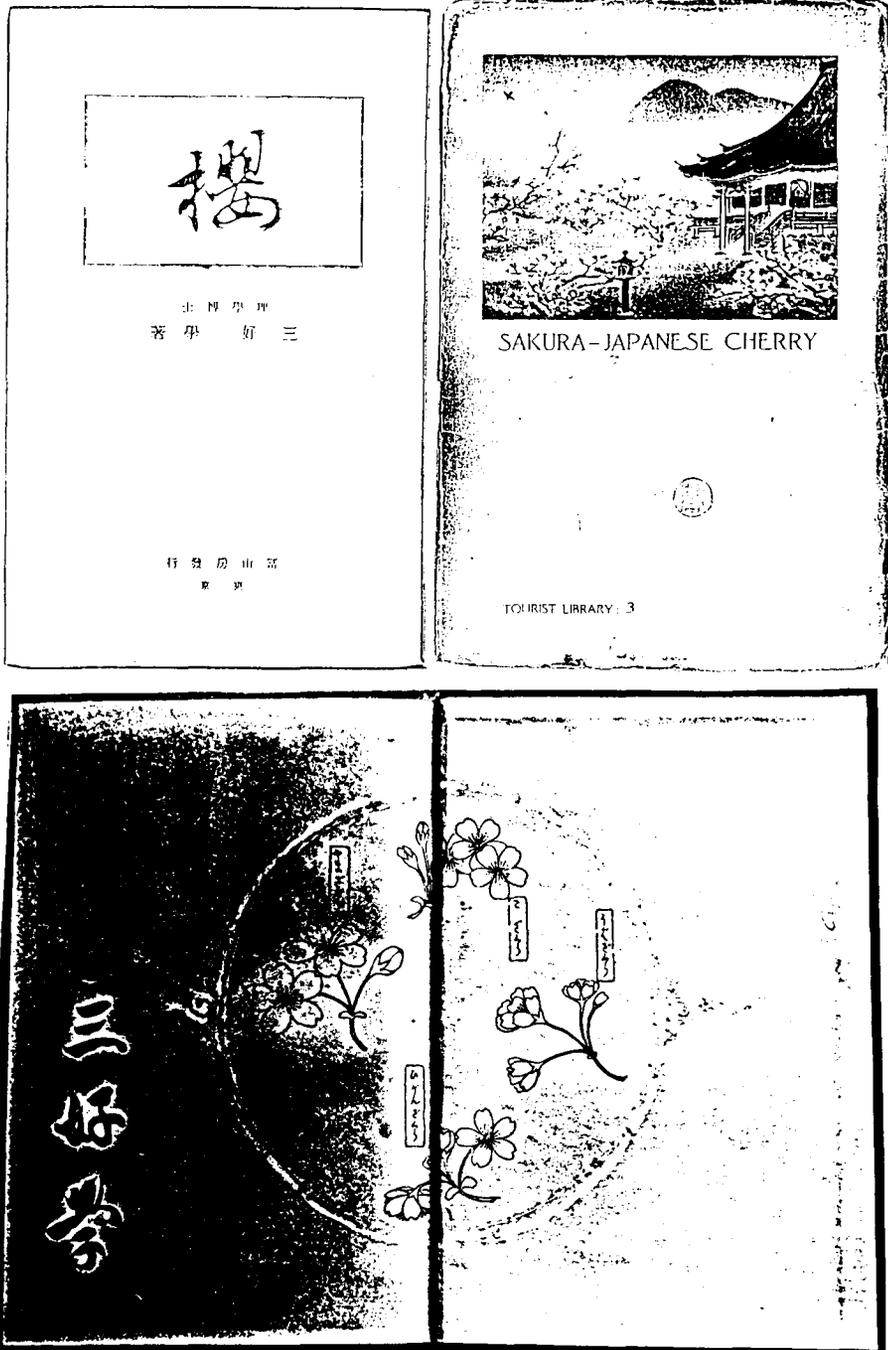


図6 『桜』の扉(上右)桜は三好の自筆である(昭和13年)同見返しと三好の署名(下)と『Sakura Japanere Cherry』(昭和16年)の表紙(上左)

に集計すると、講演内容5編、解説23編、桜 題」、11編、合計61編の多数にのぼっている(表の愛護者の思い出8編、古文献の解説9編、9)。その他5編、最後に「桜についての文献解 g) 三好は外国人ツーリストのために桜に

表9. 雑誌『桜』掲載分の三好學の論説(桜の会発行、大正7年～昭和14年)

大正7年	桜 1号、5-18頁
8	江戸時代以来の桜(武蔵野会講演会に於て) 2, 2-13
8	桜花図考 2, 57-63
9	科学上より見たる桜(大正9年本会講演会に於て) 3, 2-12
9	昨年の桜の会に於て、理学博士三好學君 3, 27
10	昔の桜と今の桜 4, 2-34
10	花隠桜譜序(大9, 3, 21) 4, 35
10	江北桜譜序(大10, 1) 4, 36
10	桜の話 5, 2-10
11	「草木写生図」中の桜の図に就て 5, 71-74(大正11, 4, 18、午後1時より大和吉野山東南院で「桜の会」開催、三好は「吉野山の桜」の講演をしている。)
11	名桜の保存に就て 6, 1-7
14	桜の名所 7, 24-30
14	桜に関して戸川翁を想ふ、 7, 75-76
14	桜品記載 7, 2-8
15	桜品記載 二 8, 2-7
15	桜に関して徳川頼倫侯を想ふ、 8, 54-56
15	三熊花頭桜花帖考並に其解題 8, 14-27
昭和2年	桜品記載 三 9, 2-8
2	桜に関して名和靖氏を想ふ、 9, 96-97 御挨拶に代えて 9, 120-122(三好副会頭)
3	桜品記載 四 10, 2-7
3	左近桜 10, 11
3	指定せられた桜 10, 12-18
3	指定せられた富士桜の群落 10, 38-39
3	桜の健樹と老樹 10, 47-49
3	霞ヶ浜の桜と木曾川堤の桜 10, 50-52
3	地主桜考 10, 70-73
3	桜品図扇 10, 73
3	花の下ふし 10, 90
3	武田信頭翁と桜の文献 10, 104
3	匂桜と中村秋春翁 10, 104-105
3	桜の名木と碓井小三郎氏 10, 105
3	押花集解説 10, 106-111
3	桜の名木の保存に就て 10, 123-125
3	桜の讚美 10
4	桜品記載 五 11, 2-7
4	浴恩園の桜に就いて 11, 13-18
4	荒川の桜に就て船津静作翁を想ふ、 11, 40-41
4	桜品記載 六 12, 2-7
5	三熊露香の桜畫 12, 50-51

昭和5年	桜の樹齡 12, 76-77
5	桜に関する諸名士の談話 12, 99-100
6	桜品記載 七 13, 2-7
6	新に天然記念物として指定せられたる桜 12号34-36頁
6	三熊花顛の桜畫 12, 58
6	本居宣長翁と桜の讚美 13, 85-86
7	冬咲の桜 14, 2-5
7	桜井勉翁と桜 14, 42
8	桜に現はれたる畸態 15, 6-8
8	国立公園選定地内の桜 15, 35-36
9	美しい枝垂桜 16, 2-3
9	岡本花亭と其桜詩 16, 17-18
9	跡見玉枝先生の喜寿を祝して 16, 19
9	西野猪久馬氏と其桜畫 16, 37
9	句桜に就て 16, 39-41
9	「群桜花譜」に就て 16, 43-44
11	桜の向上性の実例 17, 2-3
12	勅銘の桜に就て 18, 2-4
13	桜の美性に就て 19, 2-3
14	熊谷桜に就て 20, 2-3 (昭和14年4月9日刊行; 1カ月後の同年5月11日に死去)

ついでに英文の解説書『Sakura-Japanese Cherry』を書いている(図6)。国際観光協会の依頼によるものである。

内容を見ると、第1章は桜の起源と歴史、日本は桜の国。見るだけでなく材・花や葉の塩漬けと大いに利用している。

古い都と周辺一畿内には沢山の山桜があり、若葉の色や花の色に富んでいる。桜は古く奈良時代・平安時代庭に植えられており、京都嵐山も吉野山の桜が移された。豊臣秀吉は1594年武将達を引きつれ、吉野山で盛大な花見の宴を催した。江戸時代には花が大きく美しく、花卉の色あざやかな句桜など変化に富んだ里桜が有名となり、植物学的、園芸学的研究にも進歩があった。封建領主の中には愛好家が現われ、写生画家も知られるようになり図譜も出されている。明治維新で桜は顧られなくなるなか、高木孫右衛門のような育種家が育てた桜が荒川堤に植えられている。

1912年東京市長よりアメリカ合衆国へブレ

ゼントされワシントンのポトマック河畔に植えられた桜は荒川堤の桜の子孫で五色桜である。

花見は日本人の社会生活のなかで最も重要な行事の一つで、すでに徳川時代には江戸の花見の図絵が沢山出されている。

第2章は桜の種類で、山桜、大山桜、里桜、染井吉野桜、彼岸桜、四季桜、枝垂桜、豆桜(富士桜)、丁子桜、緋寒桜、冬桜、奈良八重桜などである。千里句をはじめとして若干種の桜の彩色図も見開き頁でのせてあり、里桜では一葉、関山、普賢象(室町時代からの名桜)のモノクロ写生図が示されている。

第3章で吉野山、桜川、小金井、荒川堤、嵐山、御室、躑躅ヶ丘、熊谷堤、霞間が溪、木曾川堤などが、桜の名所として紹介されている。

第4章は特異な桜木として、奈良の八重桜、白子の不断桜、兼六園菊桜、盛岡石割桜、山高神代桜、根尾谷淡墨桜、伊佐沢久保桜、三

春滝桜、狩家下馬桜、石戸蒲桜、大戸の桜、最後に祇園の桜について日中と夜の二枚の写真を添えて夜桜をたたえている。

第5章桜の植樹、第7章桜の鑑賞と保護で新渡戸稲造の「Bushido, the Soul of Japan」から引用して本居宣長の「敷島の和大心を人とわば朝日におう山桜花」からはじまっている。桜の集団美を讚美し、桜の会、会報『桜』を紹介し桜の保護を訴えている。

桜樹下の中世の美女（浮世絵）や雨水に浮ぶ花びらなど情緒的照片を各所に添えている。第1版は昭和9年(1934)B6版70頁で出版された。第3版は80頁、昭和16年(1941年)に出ているが、三好没後2年のため愛弟子の本田正次博士により加筆されている。

### 3. ドイツ留学

(1) ライプチヒ大学フェッファー教授の許へ帝国大学から植物学研究のためドイツ留学を命じられた三好は、明治24年(1891)8月19日、エンプレス オブ ジャパン号で横浜を出港している。太平洋を東に進み、同29日、カナダ バンクーバーへ上陸、それより陸路で北米大陸を横断、ニューヨークに到着、9月10日ニューヨークをフェルスト ビスマーク号で出帆、途中、英国のサザンプトンに寄り、同19日、ドイツのクックスハーベンに着き、ここからハンブルグ、ベルリンを経由して、目的地のライプチヒには、9月19日に到着している。

ここのライプチヒ大学には当時、植物生理学の世界的泰斗のフェッファー教授Wilhelm Pfeffer がおり、教授の許に多くの国々の俊才が集まり、研鑽を積んでいた。そして三好も同教授の研究室で、3か年余の研究指導を

受けることになる。

この時の旅行とライプチヒ大学の様子に就いては、三好が同年10月6日付で東京英和学校(現青山学院大学)の教員に出した手紙が、明治24年12月の同校の『須論』20号(22~26頁)に掲載されており、詳細を知ることが出来る(この手紙は明治25年2月15日の『教育時論』246、27~29頁にも転載)(図7)。

なお三好がドイツから郷里岐阜県岩村の父方の叔父小林<sup>ただす</sup>制に当たった絵端書が、小林家に保存されている。図8がそれで明治26年1月、ライプチヒからの年賀状、次のが同年8月5日ミュンヘンからのもので、後の陸軍大将で同郷の大島健一にライプチヒで会ったことなどが記されている。もう一つのもは27年11月19日にライプチヒ投函のもので、英国、オランダ、ベルギー、オーストリアを漫遊し、「不遠婦朝ノ心組…」と書かれている。この当時の三好の書翰で所在の判明しているものは、今のところこの3通のみである。

#### (2) フェッファー教授の許での研究

1893年3月6日、ライプチヒで開かれた学会でフェッファー教授は、日本からの留学生三好の「菌糸の趨化性運動に就いて」の研究を紹介している。これが印刷となったものが、“Über Untersuchungen des Herrn Dr. Miyoshi aus Tokio betreffend die chemotropischen Bewegungen von Pilzfäden. Von Professor Pfeffer”で、Berichten der mathematisch-physischen Classe der Königl. Sächs, 1893年の1~6頁(図9)。

指導教授が門弟の研究成果をこの様な形で紹介する例は、日本では見掛けないように思うが、三好の研究が特に優れていたからであろう。この研究が三好がフェッファー教授の門を叩いた1891年9月から、1年8か月とい

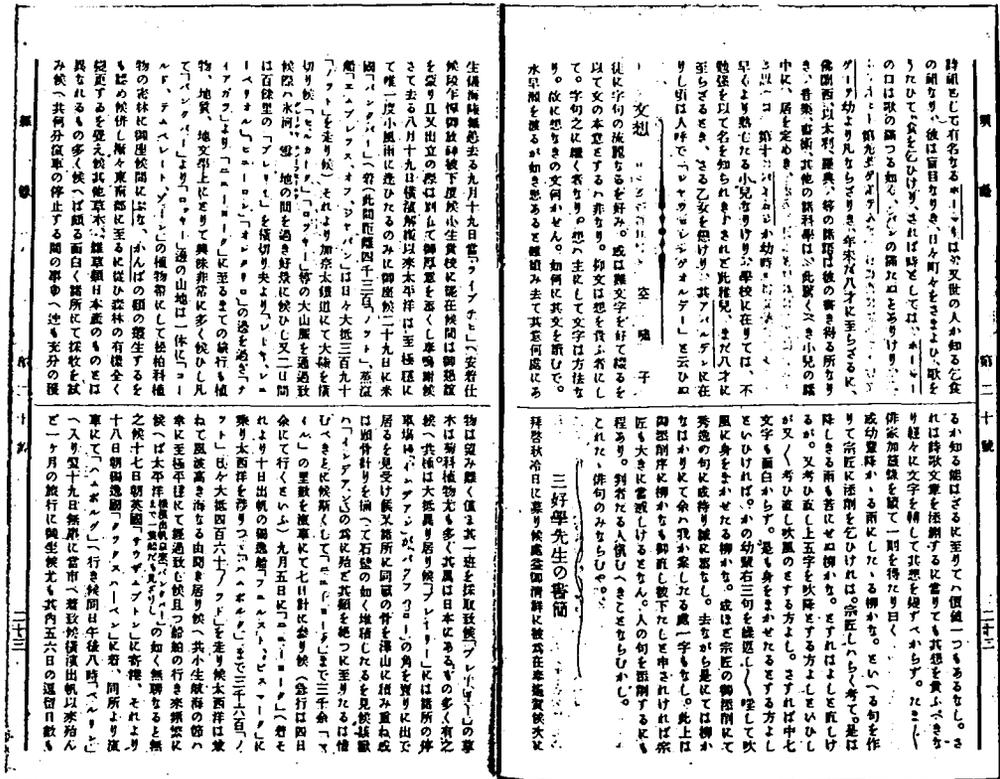


図7 三好が明治24年10月6日にライプチヒから東京英和学校の教授講師に宛てた手紙  
 (『須論』第20号22~26頁、明治24年)

う短い期間の成果であることを思うと、三好がいかに優秀であったかが判かる。

この成果は翌1894年に三好の正式な論文『菌糸の趨化性に就いて』として、ライプチヒで刊行されていた著名な植物学の雑誌 *Botanische Zeitung* 第52巻に掲載されている。これは27頁に及ぶ力作で、4つの表と1つの図が付されている(図10)。

安江安宣先生に岡山大学資源生物科学研究所図書館のフェッファー文庫の中にあるこの論文のコピーを頂いたが、表紙にProf. Pfefferの印があり、三好の論文(1~27頁、投稿は1893年5月)の第27頁に多数の書き込みがある。安江先生によるとフェッファー教授自身のもではなからうかとの事であった。論

文は I. 序論 II. 概説と方法 III. 化学的  
 刺激による菌糸の偏向 IV. 偏向の様式など  
 の10項目よりなり、最後に研究成果(上記の  
 第27頁)が述べられている。所属はライプチ  
 ヒ大学植物学教室である。前述の通りこの論  
 文は2年足らずの研究期間で仕上げ、しかも、  
 きちっとしたドイツ語で書かれている。三好  
 の欧米の植物学会へのデビューを飾るにふさ  
 わしいものと言える。

この研究に用いたカビは、ケカビ *Mucor Mucedo*, ヒゲカビ *Phycomyces nitens* (接合菌綱 *Zygomycetes*)、アオカビ *Penicillium glaucum*, コウジカビ *Aspergillus niger* (子のう菌綱 *Ascomycetes*)、ミズカビ *Saprolegnia ferax* (卵菌綱 *Oomycetes*)

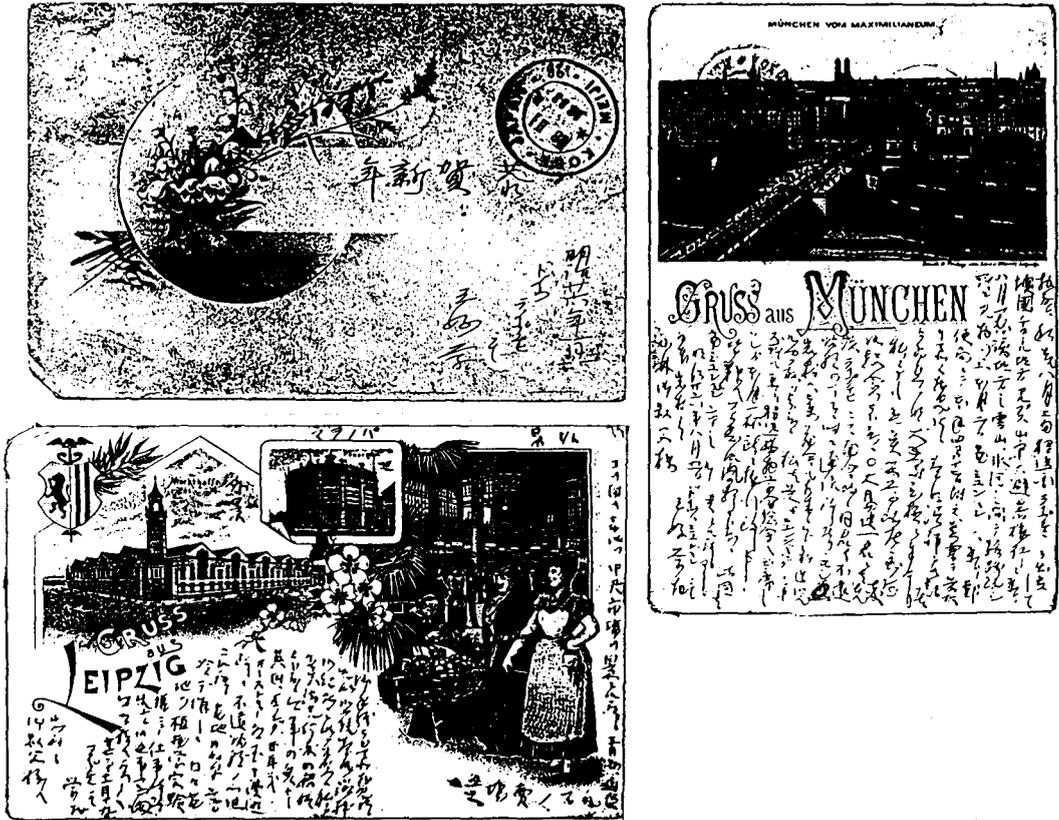


図8 三好のライプチヒからの年賀状（明治26年1月）、ミュンヘンからの絵端書（同年8月5日付）ライプチヒからのもの（27年11月19日付）（小林家所蔵）

で、この論文の図と同じではないが、よく似たものが『植物学講義』（明治32年初版）に載せられている。安藤の手許にあるのは『改訂植物学講義』（明治35年第6版）で、これでは第392図で *Mucor* にクモノスカビの名が与えられている。三好は1894年に『Ueber Reizbewegung der Pollenschläuche』を Flora 第78巻に発表している（図11）。内容は趨化性、他の要素、花柱内の花粉管の成長、結論、結果概要から成り17頁（77～93頁）に及び、1894年1月、ライプチヒで結ばれ、フェッファー教授に心からの謝辞が添えられている。翌1895年には『Die Durchbohrung von Membranen durch Pilzfäden』を Jahrb. f. wiss.

Botanik の第28巻に発表した（図11）。これは269～289頁の20頁に纏めてあり、序、文献、方法など8章と附図3葉を含んでいる。三好は期間を限られた留学ではあったが、当時としては極めて斬新な実験植物学の分野で、矢継ぎ早やに研究成果を発表し、ドイツ植物学界に彼の名を知らしめることになった。そして、この頃の日本の植物学者としては類例が無いのではないかと思うが、20世紀前半の最も有名な Strasburger の植物学教科書『Lehrbuch der Botanik für Hochschulen』（Jena, 1919）の第632頁と英訳本『Strasburger's Text-Book of Botany』（London, 1921）の第761頁に三好のこれらの業績が引用される

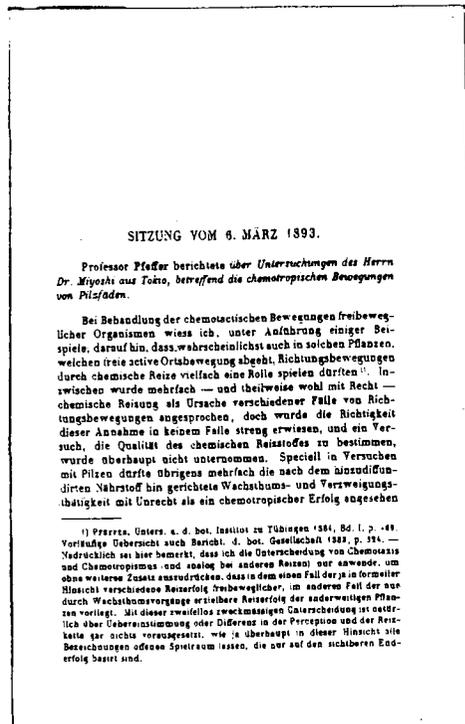
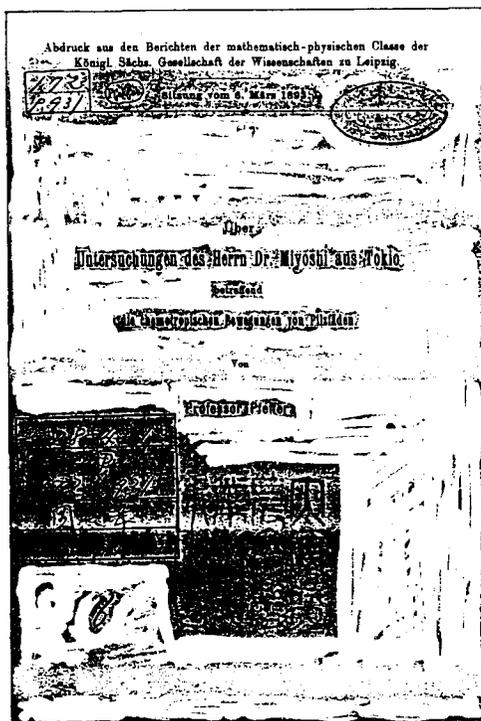


図9 Pfeffer教授が三好の研究を紹介した“Berichten der mathematisch-physichen Classe der Königl. Sächs.Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig”別刷の表紙(左)と第1頁(右、1893年3月6日)

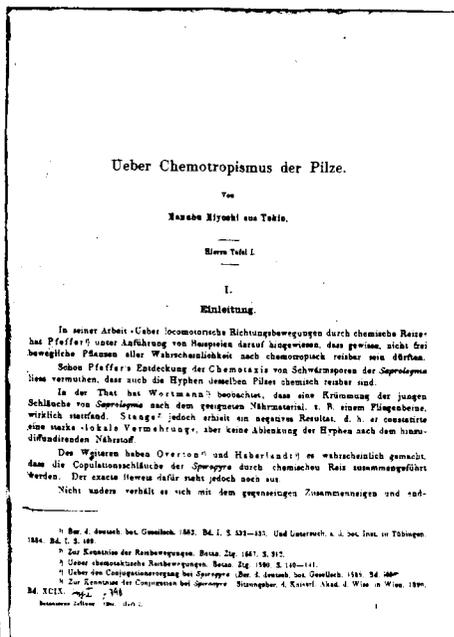
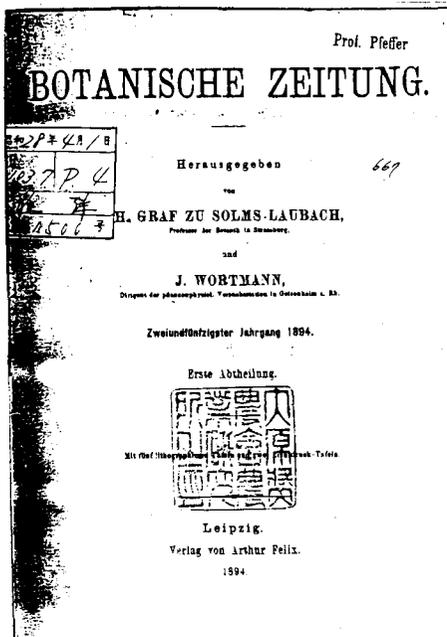


図10 a 三好の論文「Ueber Chemotropismus der Pilze」が掲載された Botanische Zeitung (52) (1894 : Prof. Pfefferの印がある) 表紙と第1頁

— 27 —

... Stoffe im positiven Chemotropismus, wenn der Stoff auf den ... nicht, oder von demselben hinweg negativer Chemotropismus, wenn ... im Pilz abwesend ist. Einigen Stoffen gegenüber verhält sich der Pilz ganz indifferent.

... chemisches Reiz kann außer der Ablenkung der Hyphen auch eine locale ... ... zu Stande kommen. Dies ist besonders dann der Fall, wenn die ... ... eine ziemlich hohe wird.

Die Art und Weise der Ablenkung ist von der Concentration abhängig. Sie ist an ... ... bei der optimalen Concentration. Bei Zu- oder Abnahme der Concentration ... ... sich allmählich.

Die Schwelmschritte einiger Stoffe sind sehr gering, der von Rohr- und Trauben- ... ... für Mezer ist nur 0,01 g, der von Fleischextract für *Saprotelium* ist 0,005 g.

Am reichend haben sich verschiedene Stoffe erwiesen. Ihre Wirkung ist indessen ... ... gleich stark und bei den verschiedenen Arten nicht in ganz gleichem Verhältnis ... ... Mezer, *Phanerochaete*, *Panicum*, *Aspergillus* und *Saprotelium* wirken im Allgemeinen ... ... kräftigst, Pepton, Dextrin und die neutrale Salze der Phosphorsäure und die Ammonium- ... ... Verbindungen als gute Lockmittel. Auf *Botrytis* wirkt Fleischextract und die Ammonium- ... ... besonders stark anziehend. Unsere fünf Schimmelpilze hingegen werden durch Zucker in betrö- ... ... hender Weise angezogen. *Phanerochaete*, *Aspergillus*, *Panicum*, *Mezer* und *Saprotelium*.

Die Repetition wird veranlaßt durch Säuren, Alkalien, Alcohol abwesend auf *Saprotelium* ... ... Ausserdem kann Ablenkung erzielt werden durch sonst gute Lockmittel in starker Con- ... ... centration. So ist z. B. 10 g Fleischextract für *Saprotelium* und 50 g Traubenzucker für ... ... *Phanerochaete* regulär.

Die für die chemotropischen Erscheinungen hat das Weber'sche Gesetz Gültigkeit. ... ... Die Hyphen von *Botrytis Bassiana* und *Penicillium* und die Kammschläuche von *Uredia* ... ... zeigen ebenfalls chemotropisch reagieren. Die ersteren werden durch Fleischextract und ... ... Pepton angezogen, die letzteren durch Phosphorsäure und Wasserstoffperoxyd.

Die Hyphen von *Penicillium glaucum*, *Botrytis Bassiana* und *Penicillium* durchbohren die ... ... Zellwände des Zwietschels, welche auf einer Nährgelasse liegen.

Die Pollenschläuche zeigen chemotropische Reize an. Sie werden durch Zucker, ... ... Pepton, besondere Rohr- und Traubenzucker, Dextrin, Phosphorsäure angezogen, während ... ... sich anderen Stoffen gegenüber negativ chemotropisch oder indifferent verhalten.

Botanisches Institut der Universität Leipzig, Mai 1893.

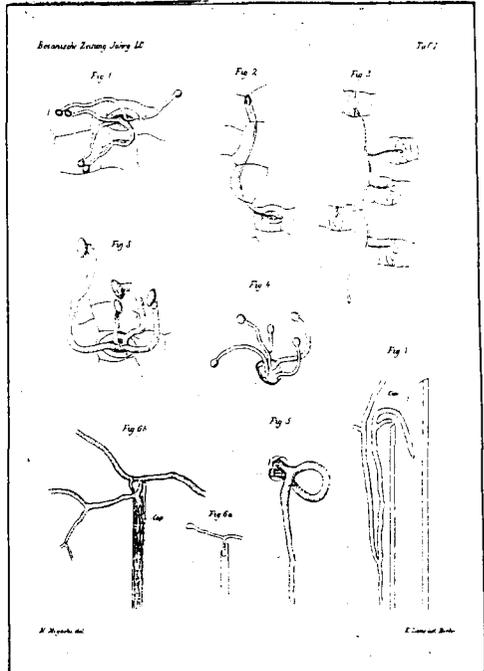


図10 b 同第27頁 結果概要へのフェッファ教授のものと思われる書込み(左)と図版(右)

Ueber Reizbewegungen der Pollenschläuche

von

Dr. Masabu Miyoshi

In meiner früheren Arbeit<sup>1)</sup> habe ich die chemotropische Reizbar-  
keit der Pollenschläuche behandelt und es soll nun in Folgendem  
gezeigt werden, welche Mittel bei der Lenkung der Pollenschläuche  
bis in die Samenknospen zusammengefasst. Dem hierüber sind  
zur Erreichung des Zieles die chemotropischen Reizungen allein  
unzureichend und alle anderen auf das Thema hütigen Arbeiten  
behandelten nur einzelne Factoren, die mehr oder weniger wirkten.

Die Literatur über den Gegenstand ist bei Pfeffer<sup>2)</sup> und zum  
Theil in meiner betreffenden Arbeit mitgeteilt<sup>3)</sup>. Ich füge noch  
hinzü, dass in jüngerer Zeit Molisch<sup>4)</sup> die Ablenkung der Pollen-  
schläuche durch eine Ausscheidung der Karbe sowie der Griffels  
beschrieb und ausserdem constatirte, dass manche, doch nicht alle  
Pollenschläuche negativ chemotropisch sind.

Eine nähere Precision der Stoffe, die chemisch reizen, hat  
Molisch nicht versucht. In dieser Hinsicht gehen meine früheren  
Studien insoweit Anchluss, als sie sagen, dass verschiedene, doch  
nicht alle Stoffe in einem freilich sehr verschiedenen Grade reizend  
wirken. Ich erwähne hier, dass ich als besonders gute Lockmittel  
Rohr- und Traubenzucker und Dextrin constatirte, während Frucht-  
und Milchzucker weniger wirksam sind.

1) Ueber Chemotropismus der Pilze. *Bot. Zeit.* 1892, Bd. 11.  
2) Ueber chemotropische Bewegungen von Bacillen, Flagellaren und Volvellen.  
*Untersuch.* 2. 6. bei Just u. Tübingen Bd. 11, p. 655-656.  
3) Ein negatives Resultat bezüglich des Chemotropismus des Pollen erhält  
Rittger'sche, Ueber die Wasserstandsbedingungen des Pollen gegen saure Lös-  
sungen. 1887, S. 40.  
4) Ueber die Ursachen der Wasserbewegungen bei Pollenschläuchen  
(Botanisch. J. A. Akad. u. Wien, 1874, No. 11, p. 11) und die Pollen-  
schläuche des Pollen mit besonderer Rücksicht auf die chemotropischen Bewegungen  
der Pollenschläuche. *Botanisch. J. A. Akad. u. Wien* 1883, Bd. 11, p. 11.

Die Durchbohrung von Membranen  
durch Pilzfäden.

Von  
Masabu Miyoshi aus Tokio.

Mit 2 Tafeln.

I. Einleitung.

Es ist eine bekannte Thatsache, dass die Keimschläuche  
von Pilzen entweder durch natürliche Oefnungen (Stomata) ein-  
dringen oder die Membran des Pflanzentheiles durchbohren.  
Ueber die hierbei eine Rolle spielenden Factoren sind bereits  
vielfache Beobachtungen bekannt, doch sind sie nicht genügend  
zergliedert, um die Ursache des Eindringens aufzuklären. Um eine  
bessere Vorstellung von dem Vorgang zu erhalten, ist es erforder-  
lich, den Process näher zu präcisciren und festzustellen, welche  
einzelne Momente für den Erfolg massgebend sind. Einen Beitrag  
in dieser Richtung sollen die folgenden Untersuchungen bringen.

Bekannt ist auch die Enzymbildung bei den Pilzen, die  
zweifellos bei der Auflösung der zu durchbohrnden Membran  
mitwirkt. Dagegen unterschätzt man gewöhnlich die mechanische  
Kraft, welche bei den Pilzfäden sowohl, als auch bei den höheren  
Pflanzen zur Geltung kommen dürfte. Als eine die Durchbohr-  
ung begünstigende Ursache muss ferner der chemische Reiz in  
erster Linie erwähnt werden, weil er das Hinströben der Pilz-  
fäden nach der Wirthspflanze veranlaßt. Durch den alsdann  
entstehenden Contactreiz wird ein weiteres Moment die Bildung  
von Ekstorganen geschaffen. Damit ist nicht ausgeschlossen,  
dass noch andere Factoren, wie Ernährung, Feuchtigkeit u. s.  
mitwirken.

Jahrg. 1. von Botani. XXXIII.

図11 三好の論文“Ueber Reizbewegungen der Pollenschläuche” Flora (78) (1894, 左)と“Die Durchbohrung von Membranen durch Pilzfäden” Jahrb.f.wiss.Botanik (28) (1895) (右)

ことになる。

今日でこそ、多くの外国の専門書に日本の科学者の研究が引用されているが、当時としては破格のことで、三好の門下を書いたものの中に、この事に言及したものがある。

フェッファー教授の許で、研究者と教育者の真髓となるものを与えられた三好は、明治28年4月18日帰国すると直ちに帝国大学教授に任命され、理学博士の学位を授与される。この時から当時の日本には只一つしか無かった帝国大学理科大学の植物学教室の経営・充実、彼自身の研究、門下の指導など、三好の新しい人生の幕が切って落されることになる。

あとがき

以上で三好の研究資料Ⅱを終るが、彼の最初の著書『生理小学』が版行されたのは明治13年(1880)で、それから長逝した昭和14年(1939)まで、三好は学究者として60年近くの研究、著述の期間を持った。生涯に三好が書き残した印刷物は2~3万頁に及ぶのではないかと思うが、これは一般の学究者に比べ極めて多く、三好の研究資料の調査整理は、まだ緒についたばかりの観がある。今回も本学図書館の主任司書甘利麗子さんに種々お世話になった。最後になったが、厚くお礼を申上げる。

#### 文 献・資 料

- 1) 安藤裕(1993) 植物学者三好學研究資料Ⅰ 清泉女学院短期大学研究紀要、第11号
- 2) 三好学(1993) 『授業日誌』解説付き 岐阜県岩村町教育委員会
- 3) 安藤裕(1993) 『授業日誌』と三好學・三好

學『授業日誌』解説、岐阜県岩村町教育委員会  
4) 安藤裕・酒井敏雄(1992) 日本の近代植物学を興した三好学小伝 清泉女学院短期大学研究紀要、第10号

(桜関係) (1)~(4)は本文の見出しと対応

- (1) Miyoshi, M. (1916) Die japanischen Bergkirschen, ihre Wildformen und Kultur-raseen. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. vol.34 Art.1.

三好学(1921)『桜花図譜』上巻・下巻 京都

三好学(1921)『桜花概説』

Miyoshi, M. (1920) Untersuchungen über japanische Kirschen I. Bot.Mag. vol.34, no.404

" (1920) — II. Bot.Mag.vol.36 no.421

" (1928) — III. Bot.Mag.vol.42 no.504

三好学(1920~1928)『桜花写生図』

Miyoshi M. (1910) Botanische Studien aus den Tropen. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, vol.28 Art.1

Miyoshi, M. (1927) Some remarkable instances of improvement of flower characters in cultivates cherries, Bot.Mag. vol.41 no.483

三好学(1936) 桜の向上性の実例 桜17号

- (2) 三好学(1929) 荒川堤の桜と船津静作翁史蹟名勝天然記念物 第4集第3号

三好学(1919) 市橋長昭撰花譜の解題並に其文献的価値 東洋学芸雑誌 第36巻451~452号

三好学(1926) 坂本浩然の群桜花譜『桜』

三好学(1936) 桜の文献に就て 史蹟名勝天然記念物 第11集第1号及び『桜』

三好学(1937) 長者ヶ丸桜譜と草木奇品家雅見 植物学雑誌 51巻 602号

- (3) 三好学(1927)『小金井桜花図譜』2冊 東京市役所

三好学(1931) 荒川堤の桜 東京府名勝天然記念物調査報告書 第8冊

- (4) 桜の会会報(1918~1943)『桜』1号~23号

三好学(1935)『桜』富山房

Miyoshi, M. (1941) Sakura-Japanese Cherry (Tourist Library 3), 3rd ed.